バラエティー 夕刊
evening variety

横綱・白鵬関が引退

瞳の奥には草原の狼がいた

小松成美の情熱取材ノート

第69代横綱・白鵬翔がついに引退を決めた。

36歳の若さだが、入門から21年で満身創痍に。特に右膝の怪我は重く、もはや横綱の重責を果たすことは難しい。

記録ずくめの力士であることは誰もが知っている。2004年7月場所に新入幕を果たすと、わずか3年で横綱へ。2007年の7月場所に横綱として初の土俵に立ってから14年、幕内通算勝ち星1093勝、優勝回数45回、横綱在位は84場所。

新型コロナウイルスによる休場や無観客の場所を経験しながら「東京オリンピック2020までは現役で」という目標を頑なに譲らなかった白鵬関は、今どのような気持ちで土俵を去るのだろうか。

ずば抜けた語学力

私が白鵬関の本（『横綱白鵬 試練の山を越えてはるかなる頂きへ』学研刊）を執筆するためにインタビューを始めたのは、63連勝の記録を作る2010年だった。

「私の父はモンゴル初のオリンピックメダリストで、母は外科医でした。末っ子の私は甘えん坊で中学生になっても父と母の間で寝ていたんですよ。私が強くなりたい、絶対に負けたくない、と思えたのは、父の栄光を汚したくなかったからです。そして、何より母を心配させたくなかった」

モンゴル出身の力士は誰もが流暢に日本を話したが、中でも白鵬関の語学力はずば抜けていた。

取材で長時間話しを聞いても、白鵬関の話しは魅力的で飽きることがなかった。私は彼のストーリーテラー（物語の紡ぎ手）としての素晴らしさに目を見張ることになる。

マイケル・ジョーダンに憧れてNBAの選手になることを夢見ていた少年時代、日本での相撲体験合宿にやってきた15歳の少年が観光気分で力士になると決めたたった一つの理由、暴力事件で突然に引退した朝青龍を思って泣いた夜、天皇陛下（今の上皇陛下）より賜った手紙の御言葉に心が震え涙した日の記憶、など、隣でただ頷きながら聞いていた私は、母国語ではない言語で、その壮大な運命を語る白鵬関に魅せられていった。

一生忘れぬ出会い

最も衝撃だったのは大草原でのある邂逅だ。その声に耳を傾けた私は、墨田区にある宮城野部屋の稽古場の畳に座りながら、モンゴルの大自然を見ていた。

「新入幕の2004年の夏、1週間の休みをいただきモンゴルへ帰りました。両親と私は車でウランバートルから500キロ離れた親戚の家を訪ねます。親戚家族と食事をして帰路についたとき、一生忘れない出会いがあったんです」

目の前に白い巨大な動物が現れ、運転手が車を急停止させた。助手席に乗っていた白鵬関はフロントガラス越しに見える動物が何なのか分からなかったが、後部座席に座っている父が「狼だよ」と教えてくれた。

「狼は車の前で立ち止まり私を見ていました。瞳の色は青と緑が混じった不思議な色をしていて、私は引き込まれそうでした」

狼が草原の中に消えると、白鵬関はモンゴルの古い伝説を思い出していた。

「遠い昔、狼はモンゴルの人々に『俺と同じ運を持つ者は俺の姿を見ることができる。俺より強い運を持つ者は俺を倒すことができる』と言ったんです。その日から私は、狼を倒すことができる強い力士になりたい、と考えました」

2006年、21歳で初優勝したとき、瞳の奥には狼が見えていた。

「狼よりも強い運を持ち、相撲の世界で誰にも負けない者になりたい。私はあの狼を見たときから、そう願い続けています」

日本国籍を取得し日本人になった白鵬関の胸には、今も草原の狼が住んでいる。狼を倒す強さへの渇望は、親方になっても変わらない。

（こまつ・なるみ＝作家）

◇毎月1回掲載します。

7月の大相撲名古屋場所で全勝優勝し、インタビューに答える横綱白鵬関　（代表撮影）

被災地のペットたち
給餌活動から見えたもの

日比輝雄

1995年1月17日に阪神淡路大震災が起きた時、私は神戸に住んでいて病院に事務局長として勤務していました。

発生直後から病院機能を維持しつつ、けがをした方だけでなく、家を失って病院に集まってきた方たちのケアもしたり、給水車がまだ来ない中、浄水場まで水を確保しに行ったり。ただ、その時は被災者のペットのことまでは目に入っていませんでした。

東日本大震災後、福島県飯舘村に残されたペットの給餌活動に入った時、出会ったボランティアさんに神戸から来たことを話すと、「阪神淡路大震災でも動物ボランティアをしました」と語る方がいらっしゃいました。そうか、あの時もそういう支援をした方がおったんやと思いましたね。

2012年8月下旬に福島県郡山市に引っ越して、飯舘村のどこにどんな動物が残されているのか1軒1軒回っていきました。他のボランティアの方たちとも連携して情報を共有していくにつれて、給餌の効率が上がっていきました。

夏は餌が腐ってしまったり、餌に虫が湧いてしまったり。冬は水が全部凍ってしまって、犬は飲む水がなくて、雪をなめたりしていました。

動物にとっては本当に厳しい環境。彼らの姿を見て、ご飯は絶対やる、ひもじい思いはさせないから、という気持ちで活動していました。

12年のクリスマスイブ、その日、初めて足を踏み入れた村内の地区で餌をやる準備をしていたら、1匹の猫が私の車に飛び乗ってきました。その子には妻が「イヴ」と名付けて保護して、今も一緒に暮らしています。

（給餌ボランティア、談）

ひもじい思い させない

福島県飯舘村で出会った犬のチビ（右）と猫のレオ　＝2013年1月

ひび・てるお　1945年生まれ、神戸市在住。金大卒。2012～19年、福島県飯舘村の犬や猫の給餌ボランティア活動に従事。その様子を1580回にわたってブログで発信した。

健康的な食事に 不健康な執着

健康&医療

摂食障害の一種 オルトレキシア

「健康的な食べ物への不健康な執着」と呼ばれるオルトレキシアは自分が考える健康的な食事に執着し、それしか口にできなくなる摂食障害の一つ。パークサイド日比谷クリニック（東京都千代田区）の立川秀樹院長は「あまり知られていない病気です。本人も気付かないことが多く、周囲の指摘で初めて自覚する場合が少なくありません」と話す。

白米だけの人も

オルトレキシアは、拒食症や過食症のように体形や体重ではなく、自分が考える健康的な食事に強い執着を示す。小麦、肉や魚、卵などの動物性や、添加物が入っている食品を口にせず、極端な例では白米しか食べない人もいる。

立川院長は「健康を意識し始める30代以降の女性で目立ちます。こだわりが強く、他者からの情報に影響されやすい、行動の結果に対する想像力に乏しい人が発症しやすい傾向です」と説明する。

最初はダイエットや健康目的だが、次第に自分の中で絶対的な健康食をつくり上げ、それ以外は悪であるという強迫観念に支配される。子どものアレルギー改善食にこだわるあまり、自らが発症した母親もいるという。

「自分で決めたルールがコントロールできなくなり、人と食事に行けないなど生活に支障を来し、人間関係にも影響を及ぼします」

気長に強迫観念取り除く

薬でセロトニン補う

オルトレキシアは、多くの場合、強迫性障害に移行しやすい。「一日中、食事のことが頭から離れません。まずこの強迫観念を取り除いていきます」と立川院長。薬で脳内の神経伝達物質の一つであるセロトニンを補うと、思考に余裕が出てくる。その後に考え方や物事の捉え方を変える認知行動療法を行う。

「今まで体に悪いと思っていた食べ物でも、少しくらいなら大丈夫と思えるようになり、食べられる物が増えていきます」。健康志向をゼロにするのではなく、困らない程度までハードルを下げることが治療のゴールになる。時間はかかるが、気長に取り組むことが大事だ。

オルトレキシアは、本人が病気だと気付かない限り治療を始めるのが難しい。立川院長は「食事のことで周囲から指摘され、不都合を感じることが多かったら、摂食障害を診る精神科の医療機関に一度相談してください」とアドバイスしている。

健康的な食事に不健康なまでに執着してしまう